



# NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2015.9.1 発行 NO.36

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

## 報告 乳幼児の心の理解への新しい知見の始まり

「乳幼児は生後数か月で、すでに他者の心がわかり、きわめて『人間的な』応答をしている」

「人をからかうし、ふざけるし、こちらの期待、構え、関心をもてあそぶし、恥ずかしがったり、みせびらかしたりもしてくれた。他者の心を理解することは、この子たちにとっては何の問題もなかったように見えた」

これは、イギリス在住のヴァスデヴィ・レディさんが書かれた『驚くべき乳幼児の心の世界』（佐伯胖・訳、2015年、ミネルヴァ書房）の、本のカバーの紹介文と冒頭1ページにある文書です。この本には、従来の心理学・発達学研究では描けなかった、子どもに生まれながらにして備わっている他者を理解する驚くべき心の世界が、実証学としてまとめられていて、訳者の佐伯胖先生（東京大学・青山学院大学名誉教授）の言葉を借りれば、「レディさんの提起は、これまでの研究のありかたに挑戦状をたたきつけた」のです。

ところで、保育・子育て総合研究機構研究企画委員会（以下、研究機構）では、今、『保育のグランドデザイン報告書』の発刊準備をしています。その中で研究機構が提起したいのは、これまでの「乳幼児の教育観」を、原点からとらえ直そうということです。これは、レディさんの想いと重なります。

新制度で、3歳未満児には教育がないとまでいわれるならば、「保育」か「教育」かと、二項対立で考えるのではなく、「そもそも、乳幼児教育とは何か？」のWhat is true? を明らかにしていきたい。その時がついに訪れたと考えています。

さて、レディさんからたくさんの学びを得たいのですが、学術書であるこの本は難解です。そこで、研究機構で佐伯先生にお願いして、講話をしていただきました。研究機構だけの学びではもったいないので、先生がお話くださったことを、できるだけ紹介させて

いただきます。

### ■人間って何だろう？ What is true?

この本の読書会をいろんなところで開いてくれています。皆さん難解だという。それはなぜかといえば、日本では、What is true? という関心で心理学をやっている人がほとんどいない。つまり、どういう議論が最近流行っているのかとか、ピアジェ論はどういうことをやるのかとか、何が正しいとされているのかなど、项目的に覚えるなり似たようなことをして、それをすれば学会発表になるし、教えていけば教えたことになるとして、本当に、What is true? という問いを、教えるほうも学ぶほうも鍛えることをしないでいます。

レディの本の第2章「ギャップに注意」は、人間って何なんだろうという原点への問いを問いながら、これまでの心理学の諸説を批判しているのだけれど、問いをもったことのない人が読んだら、何いってんだろう、早くおもしろい話をいえよということになって、そこがネックになっています。

それは、例えば今回の新制度の議論を雑誌で読んでも、どうやって支えるのかの諸説は出ていても、「本当に学んでどういうこと？人間って何？発達するってどういうこと？」という根源から問い直してみようという声掛けがあまり聞こえてきません。

安西祐一郎さん（慶應義塾大学名誉教授、中央教育審議会会長）が、中教審でこれからの大学教育を根本的に変えなければいけないと提案しました。そのためにセンター試験も変わるし、高校教育も変わるし、それを目指す中学も変えなきゃいけないということで、教育を本質的に変えて、本当に考える人を育てるとか、ディスカッションを自分たちでやりたくなるような学力に変えなければならぬと提言しています。そして、かなり本気で動き始めています。私は、この改革にか

なり期待をしています。そう簡単には結果が出ませんが、でもそういう動きがいろんなところから始まっていて、これは「学ぶ」ということ自体を考え直さなければならぬということなのです。

しかし、「学力論」というのは戦前から嫌というほどの議論があり、対立があり、やりやっているから、「新しい教育」といっても、わかっている人にはわかります。安西改革がわかる。ルーツがあり、思想があり、背後にある学習観・人間観がちゃんと見えてくる。だけど幼児教育に関しては、いろんな書物を読んでもなかなかそういうものが見えてきません。倉橋惣三と城戸幡太郎という人の発達観の違いを対立的にとらえて（そう対立もしていないのですが）、そこからでも問わないと見えてきません。いったい発達とは何かが全然問われないまま、進んでいるのです。

こういったことを原点から問い直さないことにはだめだというメッセージが、レディさんの革新的なところで、根本的な問題になっているわけです。そういうことを踏まえて話します。

## ■人間は本来「間柄的」存在

人間が、一番最初に生まれたのがアフリカのどこかというのがかなりわかり始めてきたわけですが、ある集落に数万人規模のホモサピエンス族が発生していたわけです。その頃、スマトラ島でもすごい火山噴火が



驚くべき乳幼児の心の世界  
「二人称的アプローチ」から見えてくること

ヴァスデヴィ・レディ・著  
佐伯胖・訳  
A5判・378ページ  
本体 3800円+税  
ミネルヴァ書房  
<http://www.minervashobo.co.jp/>

あって、平均気温が12℃下がる強烈な寒さに覆われました。食物が育たなくなる、動物はあちこちで死ぬ。そういう時に一方では殺し合いが始まります。しかし生き延びたホモサピエンスはそうではなくて、他人を助けるということをしたんです。

寒冷期が数年続くわけですが、その寒冷期の前にどれくらい黒曜石が使われていたかの分布を考古学者が調べてみると、半径10kmくらいなんです。ところが、寒冷期を過ぎると、なんと70kmまで広がっているというんです。明らかに交流して、人口も増えていくんです。

エール大学のハムリンらの研究ですが、6か月の乳児に動画を見せます。坂道を上がろうとしている黄色いブロックを、赤いブロックが助けてあげるシーンと、青いブロックが邪魔をして、黄色いブロックが登れないようにしてしまうシーンを見せる。その後、赤のブロックと青のブロックを並べて選ばせるのです。すると、6か月の赤ちゃんが赤いほうを選ぶ。選ぶだけではなくて、この子の眼差しを見ると、実験者に「あなたは見ていないかもしれないけれど、こっちのほうがいい」と明らかに教えている。しかも△とか○です。それでも邪魔していることがわかって、助けていることはよいことだとわかっているわけですね。

これまで接した相手は親くらいですよ。親がそんなに意地悪するわけじゃない。親が人を助けるのも見ているはずがない。それでも、そういうことができるというのは、明らかにホモサピエンスのすごい遺伝子を私たちはもっているということしか説明のしようがないですね。そういうことを踏まえると、人間というのは本来「間柄的」存在なんだということです。

## ■私を人間として見てね

村井実先生（慶應義塾大学名誉教授）の話ですが、ロビンソン・クルーソーが孤島で一人で生活していた時は、望ましいこととほしいことは同じだった。ところが、フライディが現れた時にその二つは分かれるということです。私はほしい。でも、相手も望んでいるならば、どうすることが望ましいのかを考えなければならなくなった。つまり、私たちは一人じゃないと感じた時に、「望ましさを考えるようになる。それは、人間がもって生まれた本質だというわけです。

じつは、赤ちゃんでも違いを分けているんですね。

よい悪いという判断は、教えなければならないことではなくて、その子なりに、よい、望ましいという判断をいつも考えながら私たちに訴えているんです。

例えば、お母さんが小さい子を連れて買い物から帰る時に、荷物をいっぱい持っていて、その子が抱っことかいってしゃがみこんじゃった。それで、「もうちょっと頑張りなさい」って一所懸命にいうと、何とか気持ちを修復してしばらく歩くのだけれど、また座り込む。そこでちょっとだけ抱っこしてあげようとしたら、その子がダーンと走って最初に抱っこしたところへ戻ったというわけです。

私には（この心が）よくわかる。荷物で精いっぱい大変なことはわかるけれど、私のことを見てね。で、そのことを訴えた、あの時に戻ってねというわけです。本当に抱っこしてほしいというのではなくて、「あなたは私のことを無視しているじゃないの」「私のことをちゃんと考えているということを示してよ」という訴えなんですね。「そんなに走れるほど元気なら歩きなさい」というんじゃなくて、「ああそうだったの」といってその場に戻って、「わかってあげられなかったね」といってあげられれば、その後すたすた歩くと私は思うんです。そういうふうには子どもは要求するといういい方をするけれど、背後にあるのは、本当に私を人間として見てねということなんです。そういうことを私たちが読み取れるかどうかということですね。

### ■仲間づくりの強迫観念

山岸俊男さん（北海道大学名誉教授）の『安心社会から信頼社会へ—日本型システムの行方』（1999年、中公新書）という本があります。安心社会というのは裏切らないという社会。裏切ったと思われるのは怖いから、いつもそうだよねと同調し合うことをお互い確認し合うわけです。ところで現代という時代は残念ながら、仲間か仲間でないか、あの人は仲間でないといったらぜんぜんもう眼中にないというように扱ってしまうことをやってしまうんですね。

日本は、仲間づくりには強迫的観念があって、園に子どもを出した親は、「今日友だちと遊んだ？ 仲間に入れた？」って、そこにいつも関心をもってしまう。

ある県の小学校の先生に、1年生のみんなが一斉に集まる時に、集まらない子がいた場合にどうするかと聞いたら、何としても呼び寄せる、強制的にならない

ように、丁寧に誘導してでもみんなと同じにしないと困るということを本人にわからせようとするというわけです。ところが九州のある大学の附属幼稚園では、お片づけしだすのはみんなまちまちなんです。だから結構時間をとっている。でも、最後は本当にきれいになるんです。一人ひとりが自分でもうこれで今日は終わりにしようという時が来るまで待っているんですね。それはお互いが信頼関係にあるんですね。いわなきゃ来ないだろうではなくて、わかっているはず。同調できないのは理由があるはずと、信頼して待っている。先の生後6か月の赤ちゃんでさえ、何が望ましいことなのかがわかっている。その（赤ちゃんも）わかっているということ、（大人が）わかっているということが大事です。

結城恵さん（群馬大学教授）が、日本の幼稚園の集団主義を非常に克明に示したものがあります。幼稚園に入ったならもうその園児で、友だちとみんな仲よくしましょうということを本当に強調してしまうんですね。だから一人ひとりの子どもに、競わせて何々組だという団結心をもたせようとして、所属観、アイデンティティーを創ろうとついやってしまう。でもそれは、「私でいいのよ」というアイデンティティーとは全然違うんです。あなたという代わりにチューリップ（組）さんと呼んで、「チューリップさん廊下に並びましょう！」と面と向かっていうわけです。そう呼ばれた子は、「私はチューリップさんじゃない。ちゃんとした名前がある。ちえちゃんていうんだけど」っていったという可哀想な話ですが、そういうふうには私たちはみんな一緒に考えちゃう。それをやればやるほど、あの、絶滅寸前の飢餓状態で見知らぬ人に、どうぞ一緒に生きましょうという生き延びた人類のすごいところを私たちは忘れちゃうんですね。

何でもないことを競わせる。「どのグループさんが一番早く準備できますか？」「あれ？」「あっ、ヒョウグループさんが早い。リスグループさんもりっぱな姿勢になりました。さすが年長さん、お声も大きくて背筋もピンと伸びて、素晴らしかったですね」このように、何々しましょうっていいながら、それは命令なんですね。そういう言葉で駆り立てよう、駆り立てようとしてしまう。それはおかしいということで、出てきたのがレディの本だったわけです。



## ■子どもを社会の文化的実践者として受け入れる

レディさんが自分の赤ちゃんを出産してわかったことは、発達心理学でいわれていることはまったく違っていた。本当の赤ちゃんというのは、じつはものすごくこちらの心は読み取るし、応えてくれるし、わざとふざけたり、見せびらかしたり、期待をもたせて裏切ったりもするし、ずるがしこいこともある。正に人間だったということを思わされたということです。

では、どうして心理学の枠の中では赤ちゃんの人間臭いところを見逃してきたのかというと、それは、これまでの心理学では赤ちゃんを三人称的に見てきたということです。観察者は個人的かかわりをもたずに、子どもがどう振る舞うのかを観察するというわけですね。対象を私と切り離して個人的関係のないものとみなして、そこから何か客観的な理論や法則のようなものを導きだし、説明しようとする。これを戒めなければいけないということが、この本の最大のメッセージなんです。

しかし、保育の新制度とかも、みんな「どうするとどうなる」をいっている。こういう制度をつくるとうまくいくんじゃないかということなんです。しかし、ここでいたいことは、「どうしてあげたらどうなる」というのではなく、「何をしながらしているの?」ということを聞いてあげる。それは、操作する対象としてではなくて、(子ども自身が)生きようとしていること、私たちに対して何かいいことをしてくれようとしていること、そういうことを読み取る、聴き取るという、そっちのほうが大事だといっているわけです。

保育者が、子どもの気持ちがわかるっていいですよ。気持ちがわかるということは何をしたいのかという内容がわかるんじゃないかと、どうしてそれがほしいのかなとか、本当は何をしたいのかなとか、本質的なことを情感込みで、そうしたい気持ちや願いという情感がわかることが大事。情感に関心をもってみるということは、赤ちゃんが私たちの情感にすごく敏感に、それを読み取ろうとしてくれているんだということです。情感が理解を先導するんです。情感先導的な理解ということレディは盛んにいうわけです。

ところが、私たちは子どもを三人称的に見て、心理学は学習論とか発達論で、どうかかわればどう変えられるかと、大人の働き方ばかりを研究課題にしてきた。これでは本当の赤ちゃんを知ることはならなかった

というのが、レディの反省なんです。そうではなくて、子どもを社会の文化的実践者として受け入れ、それを支援するような発達観／保育観こそが今必要ではないか。それは、子どもは未来の大人ではないんだ。今の子どもが、ちゃんと文化再生の先導者としての意味をもっている。イタリアのレッジョ・エミリア市の保育がいろいろ世界に先駆けてやっているのは、子どもたちの活動は「仕事」と定義づけたということ。

それはその前にフランスのフレネもやっていて、レッジョではフレネからかなりのものを学んでいるんですが、みんなが一緒になって、文化のためになること、世のため人のためになることはやりましょうというのは「仕事」なんです。フランス、イタリア、フレネ、レッジョのこうした保育観は、もともと市民革命としての幼児教育なんです。市民育て。仕事をちゃんとやる、仕事ができるということはものすごく幸せなことで、仕事をし合っていく社会というのが本当に大事だというわけです。

## ■赤ちゃんは情感で交流する

二人称的アプローチというのは、赤ちゃんを見るこちらの立場であると同時に、赤ちゃんが他者を二人称的に見ようとしているんだということです。それが『驚くべき乳幼児の心の世界』のメッセージということになるのですが、その説明の中で新生児の舌だしが出てきます。

私の孫さんが生まれたということで病院に行ったわけです。そこで生まれてほやほやの赤ちゃんを抱っこさせてもらった時に、私が舌をだしたのです。そうしたら、孫さんがじっとこちらを見ていて、何か口の中をもごもごやっている。そして、にゅっと舌をだしたんですよ。その場にいたものに「見た?見た?」といって、私だけ大満足してたというわけですが、じつは相手に対して大変な失礼をしたのです。

新生児の舌だしは、長い間、全然認められてきませんでした。心理学では、完全に無視されていたんです。ピアジェは、赤ちゃんが大人の行為を模倣できるのは大体生後8か月過ぎだといっていました。しかし、新生児は舌だしするということがじつは古くからわかっていのです。

遅延模倣というのがあります。おしゃぶりをくわえさせて、モデルが舌をだすと、赤ちゃんは返そうと

思っても舌が出ない。ところがしばらくしておしゃぶりを取ると、相手の顔を見て自分から舌だしを始めるんです。これは赤ちゃんになり代わると、知らないおじさんが目の前で舌をだして見せた。これは僕にも同じことをしてくれと要求していることに違いないから、例え急におしゃぶりをしゃぶらされても、さっきのことを返さなきゃとずっと思っている。そして僕は舌をだした。今度はおじさんが舌をだして返してくれると思ったのに、全然やってくれないので、舌だししなさいよと訴えて、今度僕から舌をだして見せた。どうよ、あんたも早く舌をだしなさいよとこういうことだったのです。

それで、先ほど私が孫さんにしたことは、舌だししたと喜んでいただけで、赤ちゃんに対して「ありがとう、じゃあ返してあげるね」と、してあげなかったのは申し訳なかったわけです。赤ちゃんはだんだんしなくなっちゃうんです。消えちゃう責任は大人にある。それはちゃんと返してあげてないから。赤ちゃんはコミュニケーションしたがっている。順番取りして、今度のはあんたの番よとやっているのに返してあげなかったということですよ。

でも、だんだん赤ちゃんはスマイルで順番取りができるようになります。微笑み返しを憶えると、微笑み返しは微笑み返しを呼び込むから、そっちのほうに移れば舌だしをしなくなるのは当たり前ですね。しかし、しばらくするとぶり返しで、今度のは本当に真似ができるよ、模倣ができるよという能力を示したくて、舌だしすることが起こってくる。これは後なんですね。

### ■三人称性からの脱却

そういうふうには、二人称的にかかわりで説明すると、一番大事なものは**応答性**なんですね。応答性というのは、赤ちゃんは自分を見てくれる人に視線を向けるんですね。赤ちゃんはやっぱり応答するというところから行為が出る。ですから、**行為は常に応答だ**ということですよ。二人称的働きかけを受けるから、二人称的に返すんです。二人称的関係で相手を見ているだけでなく、それを感じ取ろうとしている。見ていることの**情感を読み取ろう**としている。で、その情感を情感として表そうとしている、情感を伝えようとして応答する。微笑みがあったら微笑みで返す。私はあなたが微笑んでくれていることがわかっている。そのわかっていること

を、今度は微笑みで返す。そういうことですね。

それから、自己受容感覚という言葉も使いますが、これはギブソンのアフォーダンス理論なんです。他人がコップを握るのを見ている時に、握ろうとしている自分の身体感覚で握る手というのを見ているわけです。ですから今度、自分にそのコップが与えられると、正にそのコップを握るという行為を始めるわけですね。だから、模倣といえは模倣だけれど、見えていることは見えているだけではなくて、自分もやっている感覚に反映させて見ている。つまり、見ている感覚が自分の身体の中に溶け込んでいるわけです。

それで、そういうことを正にやっているのが脳ミラーニューロンで、そこが自己受容感覚の部位だとわかったということです。でも、最近のミラーニューロンの研究というのは、ニューロンではなくてシステムなんですね。それは、目的とか状況の意味とか、それまでの行為の流れとか、全部凝縮されてちゃんとやるべきことをやるんです。人がやっていることを行為だけ真似るのではなくて、その中で目的性とか、そこに至る背景とか、全部統合的に処理されているんですね。背景の意味とか目的とかも全部一斉に活動しているんですね。こういったことはレディの、赤ちゃんが私たちの行為を理解している時は、私たちの動きを理解しているわけじゃない、「なぜそうしているのか？何をしようとしているのか？やることがおもしろいことなのか？嬉しことなのか？おいしいことなのか？」ということも含めた**行為理解**というものが、**直感で一挙に、直接的に理解される**というわけですね。

そこは解釈も何も必要としない。それで、乳児が他者を見ることは、同時に他者の情感も含めて感じ取る、その時同時に自分の情感も相手に伝える、他者の情感を感じ取ることを私は見ることになるし、見ているということが同時に伝えていることにもなっている。他者とコミュニケーションするということは、単なる情報交換ではなく、**情感交流をもつ**ということですよ。

なら、大げさに喜んであげればいいのかということ、これはわざとだなと読まれちゃうわけですね。だから、そういうことではなく、本当に情感が沸き起こっているものは出すものであって、素敵だなーと、本当に思うことしか伝わらない、そういうことをちゃんと把握する力を赤ちゃんはもっているということですよ。

新生児の舌だしは、情感で交流する応答だったとい

うことで、応答ということがすべてなんです。そのことで赤ちゃんは情感交流をして常に確かめ合っている。そのために照れ隠しをしている、見せびらかす、からかう、だます、そういういろんなことをやって、ちゃんと情感交流ができて、本当に赤ちゃんは私たちとかかわろうとしているということです。

最後に、私たちが外界を知る時には二人称的他者である YOU 的にかかわりを抜きにしてはありえないということです。それで YOU 的出会いが欠落すると（それが三人称的にかかわるということ）、ものすごく辛いことになるんだというわけです。ところが私たちとレディの違いは、レディさんは、はっきり喧嘩を売っているわけ。あれ間違っていますよって、私たちが三人称的に見てきたことでいかに間違いを起こしてきたかということ、ものすごく痛烈に告発しているんですよ。私は、こう思うんだけど、皆さんどうですかくらいのことをぶつぶついつただけで、「私はそのように思うんですよ」、とただただ独り言のように学会に発表してきたんです。でも私は、これからは喧嘩します。

レディさんの講演が You Tube に出っていますが、もう激しいですよ。めちゃくちゃ激しい。演壇の上を左<sup>ひだりみぎ</sup>右<sup>ひだりみぎ</sup>に動きながら、語りまくってました。そのことから、やはりこの本には、本気で喧嘩を売っている、本気で世の中に革命を起そうという気迫が入っていますよね。そういう点で、**三人称性を脱却**することがいかに必要かということです。

## ■共同注視の重要性

福井の東養護学校の実践に『まりさんのハンバーグ』というのがある。いろんな養護学校を観たけれど、先生と一緒に寝転がって話しているという場面は他ではあまり観ていない。山下先生は、まりさんとお話する時に一緒になって寝転がる、そして話すんですね。「**共同注視場面**」が一番注目すべきことなんですね。

まりさんがハンバーグをつくりたいといひだして、ハンバーグの材料を買いに店に行くんですね。そして店で人参を買うんです。人参はレシピになかったんですが、この子が人参ばかり見るものだから、「人参はレシピにないでしょ」と一所懸命教えているんですが、それでもまだずっと人参を見ている。「人参買う？」って聞いたら、かすかに頷きましたね。そういうことで

人参を買って帰るのですが、車椅子の風景がもう普通じゃないです。

埼玉大学の山崎敬一さんが車椅子の人と一緒に買い物したりする場面をずっと調べているんですが、車椅子の人が財布をやっと取りだして、レジのところをポンと投げた。するとお店の人が、車椅子を押している人に「取っちゃっていいですか?」と聞くんですね。障がい者と車椅子を押す人の関係ということを社会がどう見るのかということ、社会学でいろいろ調べているわけです。

でも、まりさんが買い物したこの店の人は、「まりさん。今日もきたの」「よかったね」とか話しかけて、「それがほしいの?」とまりさんに聴いているわけです。それがなぜ発生するかといえば、山下先生とまりさんのかかわり方を店の人が観ているわけです。まわりの人が、「あっ、人間としてかかわっている」と見るんですね。

これは、赤ちゃんに対しても同じなんです。私の孫さんですが、移動は乳母車ですね。あれは何がいいかということ、あそこに立ち上がられると、目線が街の人と同じ高さになるんですよ。だから歩いている人も話しかける。本人も喜んで嬉しそうに挨拶するわけです。話しかける。話しかけられる。この関係で、あらゆる人に話しかけまくっているんですね。これは、ベビーカーの中に入れて縛りつけているのと全然違う。自由な人間としての扱いをちゃんとみせているんですね。これはやっぱり違いますね。赤ちゃんは一人前の人間のつもりでいますから、もうニコニコ顔で自分の得意なパチパチも見せるし、いろんなことをやってくれていますよ。まわりの人もおもしろがって見ますけれど、人間として楽しんでくれる。ベビーカーの赤ちゃんに話しかけるということは余程のことですよ。それは可哀想なことなんですね。

そういったことから、赤ちゃんを人間として見るという文化を創るということは、今いったように乳母車から考え直す作業ですね。赤ちゃんはみんなと対等に（人間どうしとして）かかわりたがっていて、私たちが、「人間どうしとして」赤ちゃんに話しかけると、喜んで「かかわり返し」をしてくれる、そういう交流が、「やればできる」のだから、もっと積極的にしましようということです。

(文責/鈴木眞廣●千葉・和光保育園園長)



# 「教育」って何だ？ ——「グランドデザイン」を考える

## ◆そもそも何を大切にして保育を行っていくのか

保育・子育て総合研究機構（以下、研究機構）では、保育のグランドデザインの報告書として『乳幼児教育を保育園からとらえ直す（仮）』と題した冊子を、ただいま作成しています。

「グランドデザイン」という言葉については、『保育通信』2013年11月号に説明しましたが、もう一度お読みいただきたいと思います。

はじめに、グランドデザインという言葉について説明しておきます。私たちは日々、子どもに対する願いを抱いて、その育ちにかかわっています。そうした願いは、「こういう人間に育てほしい」というものですが、そこには「そういう人間こそ、社会で活躍してほしい」という願いが込められているはず。それは、「子どもへの願い」であるとともに、その子どもたちが生きる「未来への願い」「社会への願い」であるはず。

この「未来への願い」「社会への願い」こそが日々の保育の根底にあるもの、すなわち、保育のグランドデザインです。

この一文では、「子どもへの願い」「未来への願い」「社会への願い」こそがグランドデザインであると述べていますが、それは、「そもそも何を大切にして保育を行っていくのか」という疑問への答えになるものでもあります。

今年度より「子ども・子育て新システム」が動きだしています。そのような状況で、そもそも何を大切にして保育を行っていくのかが、わかりづらくなっています。グランドデザインを考えるということは、「そもそも何を大切にして保育を行っていくのか」を、今一度、確かめるということでもあります。

「何を大切にして保育を行っていくのか」。その疑問に、しっかりと答えることは難しいことですが、私たちは「子どもへの願い」「未来への願い」「社会への願い」を密かに抱いています。この「願い」こそが「何を大切にして保育を行っていくのか」への答えです。

## ◆みなさんとグランドデザインを考えたい

研究機構は、こうした「願い」から出発して、会員園のみなさんと一緒に「そもそも何を大切にして保育を行っていくのか」を考えていきたいと思っています。

そうして始めたのが、『保育通信』2013年11月号から連載された「保育のグランドデザインを考える対談」という企画です。この企画は、白梅学園大学の汐見稔幸学長と、保育園園長との対談を通じて、グランドデザインを考えるためのヒントを得ようとしたものでした。そこには、保育者の方々とともにグランドデザインを考えていきたいという思いがありました。その点についても、『保育通信』2013年11月号の文章を再掲します。

ところで「こういう人間に育てほしい」という願いは、人それぞれです。それは、「未来への願い」「社会への願い」が人それぞれだということです。しかし、それでいいのです。人によって、それぞれだからこそ、そこに対話が生まれます。

保育のグランドデザインをめぐる、みんなで対話をしましょう。それが、この企画の意図です。対話を通じて、グランドデザインをみなさんと考える。そういったことを願って、この企画を始めます。

グランドデザインは、一部の人間が考えて、それに他の人間が従うというものではありません。子どもの育ちにかかわるすべての人間が、ともに議論をしながら考えるものです。本企画では保育現場の代表として園長先生に登場いただき、保育理論の代表として汐見先生に登場していただきます。現場と理論との対話を通じて、グランドデザインを考えるための素材を得たいと考えています。

グランドデザインを考えるというと、大げさに聞こえますから、この対話を読みながら、ご自身が日頃の保育に込めている「子どもへの願い」をあらためて見つめる、そういった気持ちでお読みください。

園長も研究者も関係なく、子どもの育ちにかかわる仲間として、みんなで「未来への願い」「社会への願い」を考えていきたいと思っています。

この思いには、今も変わりはありません。

そして今、研究機構が作成している『乳幼児教育を保育園からとらえ直す（仮）』という冊子は、「保育のグランドデザインを考える対談」をまとめたものでもあります。

今後は、この冊子をもとに、グランドデザインをめぐる対話が広がるように企画を進めていきたいと思っています。

#### ◆グランドデザインを考える際に、「教育」をどう考えるか

『乳幼児教育を保育園からとらえ直す（仮）』という冊子のもとになった「保育のグランドデザインを考える対談」においては、多くのことが語られました。そこから浮かんできたのは「教育観のとらえ直し」というテーマです。

「教育観のとらえ直し」というテーマについて、私は「第二の教育観」という提案を、「ニューズレター」No.31（2014年6月）に書きました。

「教育」には単純にあって、二つのやり方があります。一つは、「教科書」によって世界を知っていくやり方です。もう一つは、「身をもって」世界を知っていくやり方です。

かたい言葉で言い換えると、前者は「どこかの誰かが世界につけた意味を、子どもが覚えていく営み」です。後者は「子どもが世界から、自分なりの意味を引きだし、自分なりの意味を与えていく営み」です。

私は前者を「第一の教育観」と呼び、後者を「第二の教育観」と呼びました。

そして、「教科書」によって世界を知る機会が多いのに対して、「身をもって」世界を知る機会が少ないことへの危機感を述べ、両者のバランスをとるように提案しました。その提案は、私の個人的なものです。じつはグランドデザインをめぐる対談においても語られ続けたものです。

『乳幼児教育を保育園からとらえ直す（仮）』においては、「教育観をとらえ直す」ためのキーワードとして、「カラダで世界と出会う」「何だろう?」「うつく

しい」「ともに生きる」「やわらかい」「思う、願う」といった言葉を挙げました。それらの言葉を参考に、あらためて「教育」とは何かを考えていきたいと思っています。そして、「教育」を考えるためのキーワードをみなさんからドシドシと出していただきたいと思っています。

(久保健太●篠原保育医療情報専門学校こども保育学科学科長)

#### 編集後記

##### ◎機構変動!?

とりわけこの1年、研究機構の委員会は熱い、そして厚い。議論が深みにハマって身動き取れずに蒸し暑くなることしばしば。

科学技術や世の中は日進月歩で発展するけれども、教育・保育に「発展」の文字は似合わない。普遍的な対象（子ども）への理解の深まりと発見を社会化させること。つまり、普及のための対話が肝になる。なので困難、だから悩ましい。制度は無関心でも火花を散らす議論がなされても、変えるといわれたら変わる。否も応もなくみんな一緒に改定された道を歩きます。が、教育・保育は違う。改定するか否かは自分次第。だから対話の重要性が明確になる。

『驚くべき乳幼児の心の世界』について、佐伯胖先生からいただいたレクチャーを鈴木委員長が渾身の力を注いでようやくできた「要約」。スッタモンダの極みの末に久保委員がデザインした報告集『乳幼児教育を保育園からとらえ直す（仮）』への誘い文。双方の語りに切実さを感じませんか。文字に滲んだ汗が見えますか。

今、現場が何となく踏襲してきた教育・保育を“とらえ直す”、そのための対話が必要なのです。報告集は研究機構内の対話の賜物。残暑の頃に各地で熱い対話が交わされれば機構変動。冷気のお届けでした。

(片山喜章●(社福)種の会理事長、神戸常磐大学客員教授)

##### ◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟  
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会  
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10  
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879  
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>  
E-mail [ans@zenshihoren.or.jp](mailto:ans@zenshihoren.or.jp)